

特集

拡大するリハビリテーション医療

リハビリテーション(rehabilitation)とは、re(再び)+habilis(適した、ふさわしい)+ation(状態にすること)であり、「再び適した状態にすること」を意味し、そのために行われるすべての援助活動がリハビリテーションであるという。その対象とするものは、歴史的には肢体不自由児や傷痍軍人などの厚生から、自然災害、工業化に伴う労働災害、モータリゼーションに伴う交通事故、そして生活習慣病へと広がっていったのであろうと思われる。また、その目的は障害からの離脱のみならず、QOL(Quality of Life)の改善や認知機能の改善までも目指すこととなり、さらにその場合は、広くあらゆる障害・疾患の超急性期～急性期～回復期～維持期・慢性期～終末期にまで広がり、医療施設のみならず介護・福祉施設へ、また、病院や施設のみならず地域や在宅の場へまで広がっていったのである。

今後のリハビリテーションを考えるうえで、以下の2点に注目したい。1つは、本誌グラフに紹介したような、わが国が世界に先んじるロボット工学の応用である。ロボット技術は、リハビリテーションを受ける側ばかりではなく、リハビリテーションを提供する側の福音をも、もたらすに違いないと思われる。

次に、世界一の勢いで進むわが国における少子高齢化、加えて地方で進む過疎化である。リハビリテーションは単なる障害の克服から、地域の社会保障制度を越え、各種産業までも巻き込んだ『地域の見守り』システムの中心となるように思えてならないのである。なぜならば、リハビリテーションの場こそ、先に挙げた超急性期から慢性期・終末期、施設から地域や在宅なのである。そこでは、これらの病期や空間、そして制度間を連携し、シームレスにつなぐことができる“接着剤的”役割を担える仕組みとなり得るに違いないと考えるからである。

閉塞感漂うわが国において、国民が相互に支え合いながら国力を保っていくには、全国民が疾病や障害を乗り越えて、社会の一員としての役割を担い続けていく社会構造が求められる。それ故にリハビリテーションに期待するところはますます大きくなっていくに違いない。

神野 正博

社会医療法人財団董仙会 恵寿総合病院 理事長